The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上山先生を送る
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上山先生を送る

正木恒夫

今から21年前，私が二部英語学科に着任した時，二部主事になられた嶋田先生の後をうけて，上山先生は学科主任をしておられた。当時専任教員は嶋田主事を含めてわずか5名。上八学舎の薄汚れた研究室の壁を背に，全員が向き合ってすわっていたから，何かと雑談の花が咲いた。出講日の関係で私と2人きりになった夜など，授業前のひととき弁当を召し上がりながら，上山先生がよくされたのは，戦中戦後の苦労話だった。学徒動員のこと，食料不足のこと，その頃の御無理が，先生から永久に健康を奪ってしまったことなど。当時先生は40台半ば，今も変わらぬ童顔が，先生をお若く，お元気にみせていたが，実は戦争の傷跡を深くとどめておられたのである。

そんなこともあって，私がまず先生について抱いた印象は，「忍耐の人」ということだった。誰に対しても丁重で，謙虚で，決して自説に固執されない先生のお人柄はよく知られているが，私はそこに，数々の苦難に耐えてこられた先生の底深い忍耐を見ていたのである。そして私は当時も今も，少なくとも外大において先生に忍耐をしいたものは，次の2つであったと考えている。第1に，圧倒的に母校出身者の多い英語学科の中で，先生が（甲元先生御退任後は）唯一の京大出身者であられたこと。第2に，本学では例外的に二部に対する差別意識の強い学科の中で，二部主任をつとめなければならなかったこと。とりわけ第2の点について，私にはいまだに忘れられない場面がある。一・二部の統一問題について合同会議がもたれた時，いずれも私の恩師であられる2人の先生方が，当時次々に著書を刊行しておられた上山先生を暗にさして，「ひさしを貸して母屋を取られるのは困る」「対外的には〔一・二部の区別はないのだから〕大阪外大教授の肩書でどんどん発表していかれたらよい〔だから一・

二部を統一する必要はない〕」という意味のことを（ほぼこの通りの表現で）言われたのである。それを聞かれた時の上山先生のお気持は察するに余りある。私はその場で多少の反論は試みたものの，先生のお立場を楽にしてさしあげるだけの十分な努力ができなかった――いや，しなかったことを，今もって恥としている。（なお上の諸先生の御発言の意味を理解するためには，上山先生が，御専攻のマシュー・アーノルドに関する論文はいうまでもなく，大学英語教科書や中高生向け英語参考書を含め，当時英語学科の中では，きわだって業績点数の多い方であったことを想起する必要があろう。）

めでたく停年退官される上山先生をお送りする言葉としては，少なからず穏当を欠く文章を，私はあえて連ねてきた。先生の本学における微妙なお立場と，そこで耐えてこられたものの大きさに思いをはせる時，私には虚辞をろうする勇気がなかったのである。ただひとつ私にとって（そして願わくは先生にとっても）救いとなるのは，この数年来英語学科でも世代の交代が急速に進み，一・二部の協力関係はかつてなく良好かつ流動的な状態にあることだ。今後若い世代の人たちが，人間関係においても学問研究においても，英語学科特有の閉鎖性を打ち破ってくれるなら，私たちの世代には実現しなかった新しい関係が，一・二部の間に生まれる可能性はけっして小さくない。私はこの明るい希望と期待をもって，上山先生へのはなむけとさせていただきたい。